

思考停止という病理：もはや「お任せ」の姿勢は通用しない（平凡社新書 1028）新書 - 2023/5/17 榎本 博明（著）

中西 康之

はじめに

世の中のことを疑問に思い、口に出すと、おかしいと言われる。またそんなことを言ったら危険人物とみなされると、発言を制止されることがある。思考停止が状態となっている日本では、自分の頭で考えようとして、ちょっとでも疑問を口にしたりすると、おかしい人、ときに危険人物とみなされてしまう。教育界では、これからは知識詰め込み型の教育から脱し、思考力を重視する教育にシフトする必要があるなどと言われ、それに沿った入試改革まで行われている。だが、前述のような世の中の空気からして、為政者は国民の思考力が鍛えられることをほんとうに望んでいるのだろうかと思いたくなる。

第3章 その根底に流れる教育のあり方

○ますます深刻化する読解力の危機

- ・2018年のPISAの読解力問題。5つの文が「事実」か「意見」かを問う問題（P. 108）。全問正解できた高校1年生は、44.5%。
- ・新井紀子さんの試験（著書）による問題（P. 110）の中学生正解率57%、高校生71%。
- ・これは、まさに危機である。こうした読解力の低下には、読書をしない子がふえているということが深く関係していると思われるし、読書が読解力を高めることは多くの調査研究によって実証されているが、見れば分かる教材によって、読解力の鍛錬がなされなくなっていることも関係していると思われる。

○見ればわかる教材の功罪

- ・理科や社会、状況を説明する場合において、写真や映像を駆使した見れば分かる教材は、とてもわかりやすいのだが、その代わりに頭を使うのが疎かになっていることは、意外に見逃されているのではないだろうか。
- ・言葉を手がかりに想像力を駆使して頭の中にイメージを立ち上げるという思考プロセスが省略されている。想像力も論理的思考力も鍛えられず、むしろ使わないことで萎えてしまう危惧がある。
- ・見れば分かる教材の使い方についても、教える側に十分に考慮する必要があるだろう。

○ノートをとる習慣のない学生達

- ・ノートを取ることで理解が深まる、集中力も高まる。

- ・事後にノートをまとめ直すこともより効果がある。まとめ直しの量と質で成績との関係が科学的に証明されている。記述量が多い、図の使用頻度が高い、体系化したり整理していると、成績が高い。
- ・このことから、パワーポイントのコマを印刷して配付し、聞いていけば良いと行った授業をするのは、じつは教育的配慮を欠いているといわざるを得ない。

○理解よりスキルを重視することの弊害

- ・第1章で示したが、実用文さえ読解できない若者が多いことから、小説や評論のような高度な文学作品でなく、駐車場の契約書や行政の広報文などの実用文を高校の国語で学ばせる方針が示され、物議をかもした。しかし2022年度からの刻言現代文の2、3年生向けの教科書は「論理国語」と「文学国語」に分けられ、どちらかを選択することとなり混乱を極めた。校とを「論理国語」と「文学国語」に分けようとする事自体、論理的整合性に乏しく、きわめて乱暴な発想と言わざるを得ない。
- ・大学でもエントリーシートを書くことができなかつたり、事務的な通知文書の意味を正確に読み取れずにトラブルになったりする。この意味で実用文について学ぶことは必要かも知れないが、それを国語の授業で行うべきなのだろうか。知的な鍛錬をつぎつぎに排して実用性ばかりを追求することで、ますます思考停止に陥っていくのではないか。

○読書離れによる読解力の欠如

- ・読書をすることで読解力や詩応力が高まることは、多くの調査研究により実証されている。読書と知的発達の間には性の相関関係が見られる。
- ・子どもの頃の読書活動が多いほど、社会性が高く、意欲関心が高く、論理的思考能力が高い。
- ・この傾向は、就学前から小学校低学年の頃に、絵本をよく読んだ者ほど顕著であり、読み聞かせや昔話を聞かせてもらったことの多い者ほど顕著である。
- ・子どもの頃からの総読書量が文章理解力と関係がある。そして小説などの文庫本の読書量が、新聞・雑誌やマンガの読書量よりも、文章理解力と強く関係している。
- ・読書週間が知的発達を促進することは、心理学ではすでに常識と言えるが、脳科学の研究(MRI脳画像)によっても裏付けられている。
- ・大学生の不読率が問題になってきたが、ついに2017年には53.1%になったという(全国生協調べ)。
- ・子どもの頃からタブレットをいじったり、コンピュータ・ゲームをしたりして遊び、中高生時代にはSNSやインターネットで時間をつぶす。そうしているうちに本を読めない脳になってしまった、ということではないだろうか。

- ・これからは人工知能の時代になっていくとされ、多くの仕事が人工知能に奪われると言われる。人工知能はデータの記憶はきわめて得意だが、文章の意味を読解するのが苦手である。人工知能に仕事を奪われないためには、読解力を高める必要がある。そのためにも、タブレットを使ったICT教育にばかり注力せずに、読書を推進することは、教育の未来にとって非常に重要なことと言ってよいだろう。

○検索力はあっても、思考力がない。

- ・インターネットやスマホの普及により、いちいち細かな知識を覚えておく必要がないという風潮があるが、ちょっと行き過ぎのように思えてならない。
- ・素早く検索する自分に陶醉し、何でも検索すればすぐにわかるという人たちが目立つ。雑談の最中にも検索をして、知識自慢をする。会議中やちょっとした打合せ中にも、スマホをいじり、的はずれた浅い議論になることも多い。
- ・検索を有意義にするためにも、自分の頭で考える思考力が大切である。

○「発信重視の自己主張」教育が見落としていること

- ・グローバル化に対応するために、もっと日本人も自己主張ができるようにならないといけないと言われ、自己主張が推奨されたり、プレゼンテーションのスキルを鍛える授業が導入されたりしている。でも、そうした動きは、悪くすると思考停止を招くことにつながりかねない。
- ・日本人が堂々と自分の意見を述べることができないのは、相手の気持ちを気にして自己中心的に振る舞えないということに加えて、日本文化においては認知的複雑性の高さに価値が置かれてきたからだ。認知的複雑性は、ものごとをさまざまな視点から見ることができるかどうかということである。
- ・ただし、間柄を大切にし、人の気持ちや立場や意見を尊重する日本文化は、認知的複雑性を高めると同時に、属人思考（174P）によってせつかくみにつけている認知的複雑性を封印し、思考停止に陥らせることもある（これについては第4章）
- ・学校教育においては、プレゼンテーションスキルのような表面的な技を学ぶのではなく、もっと思考を深めるため、様々な視点に触れ、これまでの自分になかった視点を取り込むことが重要な課題となってくる。そのためには、発信力ではなく吸収力を重視する教育が求められるのではないだろうか。

第5章 考える力をうばう教育からの脱出を

○考える力を身につけるための知識・教養の吸収

- ・知識と思考の関係を押さえておく必要がある。知識と思考が対立関係のようにみなす議論もあるが、知識が思考の邪魔になるというのは、まったく無思慮な誤解にすぎない。

- ・知識受容型の教育～主体的に学ぶ教育に転換すべきだというのはよいとしても、それは、知識を吸収する姿勢を受け身ではなく能動的にすべきだという意味に受け止めるべきだろう。与えられた知識を丸暗記するようなことはやめて。その意味をしっかりと理解し、頭之中を体系的に整理しながら知識を吸収していくのが望ましい。

○読書習慣を促し、読解力・思考力を高める。

- ・思考力を重視するという観点から、大学の入試改革でも記述式の導入が検討されている。中学入試などでも記述式の出題が目立つようになってきた。国語だけでなく算数でも記述式問題が増えている。ニュースや新聞の出来事や課題に関心を持ち、身近な生活と結びつけて考えさせるような良問が出題されてきたが、この傾向が広がってきている。
- ・表やグラフをもとに自分が判断したことの根拠を説明したりするには、語彙力や読解力が必要である。そこで大切なのが読書習慣である。
- ・単に記述式の問題の練習をするのではなく、もっと根本的なところで能力を高めるべく、これからの教育においては、読書習慣の形成を促すことが大切である。

○新聞やテレビニュースの効用

- ・思考力を磨くためには、いろいろな視点を自分のなかに取り込むことが必要である。そのためには、新聞を読むことが大事だというと、ネットでニュースを読んでいるから、自分には新聞は必要ないという人も居る。だが、それは新聞のニュースとネットニュースとの基本的な性質の違いを理解していない。
- ・新聞（テレビでも）は、政治や経済、スポーツなどあらゆる領域の記事が目飛び込んでくる。しかし、ネットニュースは、気になるテーマをクリックして主なニュースを引き出す。気になるニュースがとても容易に手に入り、便利で気分のよい記事のみをみただけなので、きわめて心地よい。ニュースが個性化されているので、一面的な見方しかできなくなる。なので、新聞やテレビで、多様な領域の記事に触れておくことは、複眼的にものごとを検討する心の姿勢を保つ上で、とても大切だ。

○発信力よりも、まずは吸収力を高めることが大切。

- ・SNSやユーチューブで誰も気軽に発信できるようになり、多くの人たちが自分の考えや思うことを発信したり写真を投稿したりしている。だが不適切な内容はもちろんだが、不適切ではないにしても、偏った考えや未熟な考えを塾抗せずに発信してしまうことある。承認欲求に駆り立てられて発信するのだろうが、本院の意図に反して、視野の狭さや考え方の未熟さが露呈し思考停止の軽薄な人物と

みなされてしまったりする。そうした事例を見て、発信力を身につけるまえに、まずは吸収力を身につける必要があることを強く感じざるを得ない。

- ・知識の丸暗記は意味がないのはもちろんだが、知識を体系化して、必要なときに引き出し安くしなければならない。知識を有機的に関連づけて、体系化することが大切である。さらに体系化を急がず、できるだけ多くの知識を、さまざまな視点からの知識を吸収することが大切である。
- ・あらゆる知識をひたすら蓄積していくと、そのうち自然に発酵し、何らかの発想がわいてくる者だし、視野が広がり、これまで得た知識や経験を体系的に位置づける視点が得られる。あらゆる知識を吸収し、それらを関連づけるメタ認知的視点を獲得するには、読書が最適だ。
- ・プレゼンテーションをしたり議論をしたりする対話的な学び方が、深い学びのために非常に効果的な方法であるかのような議論もあるが、それはあまりに偏った考え方ではないだろうか。自分以外の視点を取り入れるには、他者と語り合うことも効果的だが、それが唯一の方法ではない。
- ・読書をすることや講義を聞くことで、自分にはない視点に出会うこともできるし、読書や講義を刺激にして創造力を働かせることで、中途半端な他者との対話よりも豊かな視点を獲得することができる。

○何事に対しても疑問を持つことの大切さ。

- ・考えることの基本は疑問をもつことにある。私たちは、子どもの頃から遊びや生活の中でいろいろな疑問をもって生きてきた。しかし大人になると、惰性で動くことも多くなるのか、いちいち考えなくなる。そんな思考停止から脱するには、物事を複眼的にみる姿勢をもつことが大事である。ひとつの視点で凝り固まらずに、別の視点からどのようにみえるのかに想像力を働かす。そのためにも、いろんな考え方、いろんな立場の人の意見や感受性にふれるようにすることが大切となる。
- ・すぐに答えがでないとイライラするという人も居ると思うが、それこそ思考停止の兆候なのではないかと疑ってみる必要があるかもしれない。世の中の多くの問題に対しては、そう簡単に答えは見つからない。だからこそ専門家同士でも意見が対立したりするのである。簡単に答えがでないことにいらついたりせずに、あれこれ考えるのを楽しむ姿勢が大切なのではないか。それこそが思考停止を脱するための第一歩といって良いだろう。